

日本光学会 平成9年度年次報告

1. 総括

日本光学会前幹事長 横田 英嗣



日本光学会の会員数は2月末現在：正会員1,925名（A会員761名、B会員1,164名）、賛助会員94社（155口）、特別会員134件（176口）です。会誌「光学」、欧文誌「OPTICAL REVIEW」（以下「OR」）の出版と学術講演会「OPTICS JAPAN」を3本の柱として活動しています。

「光学」は邦文の原著論文を掲載した学会誌で毎月発行されています。多くの書類がA4判に移行しつつある現状にかんがみ、1998年1月から「光学」もA4判になり、これを機会に光学懇話会「光学ニュース」の時代から多くの研究・技術者を育ててきた「文献抄録委員会」が「光科学及び光技術調査委員会」になり、「光学工房」など魅力あるページに生まれ変わりました。学生会員を増やすためにいろいろな特典を実施しています。「OR」は光関連の国際学術誌（英文・隔月発行）として発刊され、4年目になり着実に購読数も増加しています。ぜひ、多くの論文を投稿していただき、国際的な学会誌に育つようにご協力をお願いいたします。海外での購読を増やすためにSpringer社と販売委託契約を結ぶことになりました。また、機関購読制度を廃止して、本来の会員制度に対応した特別会員制度を検討しています。

「OPTICS JAPAN '97」（日本光学会学術講演会）は東北工業大学で開催（9月）され、参加者360名、講演数163件でした。この講演会は毎年、秋の応物講演会の前後に独自の学術講演会として開催されているため、応物講演会の光のセッションとの関連が課題ですが、今年度は従来の一般講演の他に、光コンピューティング、イメージサイエンス研究グループの協力により特別セッションを行いました。今後も研究グループの積極的な参加をお願いいたします。

国際交流行事に関しては、前朝倉幹事長の代から懸案になっていたSPIEとの相互協力としてSPIEと「研究技術交流に関する協定」を結びました。その詳細は「SPIEとの覚え書」〔「光学」第26巻第7号（1997）〕に紹介されて

おりますが、その協定に基づきOSA-SPIE-OSJの合同名簿の作成事業（2月末締切：1094名登録）を終え、1998年度版として発行されます。さらに国際会議開催に関しては、第1回として1999年6月「International Conference on Optical Engineering for Sensing and Nanotechnology (ICOSN '99)」（共催：日本光学測定機工業会「ナノテクフェア」、横浜パシフィコ）を行う予定です。ぜひ、積極的な参加を期待しています。国際交流を推進するために1998年度より国際支援基金を予算化しました。

「光学シンポジウム」は日本光学会の講演会のひとつとして定着しており、今年度は「光学系および光学素子の設計、製作、評価を中心として」（6月：東大生研）のテーマで開催され盛況でした。

応用物理学会「光学論文賞」には13編の自薦・他薦の論文が集まり、選考委員会により慎重に検討した結果、本多徳行（計量研究所）、金子寛彦（ATR人間情報通信研究所）が受賞され、応用物理学術講演会（3月・東京工科大）で記念講演が行われました。また、若手のための「日本光学会奨励賞」は阿部真之（大阪大学工学部）が「OPTICS JAPAN '97」にて表彰されました。今年度は残念ながら該当者が1名でしたが、若手研究者がこの賞をめざして「光学」「OR」に積極的に投稿されることを望みます。

光学会には現在、9の研究グループがあり、それぞれ講演会・出版物を中心とした活動が活発に展開されています。主な活動として、微小光学研究グループは「MOC/GRIN '97」国際会議、光設計研究グループでは夏の学校「レンズ設計者の新たな視点」（湯河原、2日間）を開催しました。このグループでは「International Workshop on Optical Design and Fabrication (ODF '98 Tokyo)」と称する国際的な研究会開催を予定（6月）しています。また、光設計に関するすぐれた研究・技術・発明に対して「光設計賞」を設立しました。千葉大学工学部岡田勝行先生が亡くなられ、その遺族の方からホログラフィックディスプレイ研究グループに寄付をいただき、研究グループでは優秀な研究に対して「鈴木・岡田賞」（従来は「鈴木賞」がありました）として使わせていただくことになりました。誌面にて岡田先生のご冥福をお祈りいたします。研究グループの活動として、ぜひ、光学会会員の勧誘をお願いいたします。今後、新たな研究グループが設立され、日本光学会の活性化につながるよう期待します。

冬期講習会（1月・東大生研）は「発光デバイスの最先端—レーザーからディスプレイまで—」というテーマで開催されました。

「サマーセミナー」は今年度も開催されませんでしたが、若手・学生のためぜひ再開したいという意見も強く、幹事会の懸案事項として来年度に引き継ぎました。

他学会との主な協賛講演会としては、カラーフォーラム JAPAN '97（照明、色彩、写真、光学の4学会）は招待講演8件および一般講演、チュートリアルコース「色彩の基礎技術と実際」、ならびに展示会「Color Expo '97」が開催（11月、工学院大学）、光学五学会関西支部連合講演会「構造で色を創る—表面構造と光学現象—」が開催されました。

また、光学会主催の地区講演会として今年度は関西講演会（兼応用光学懇談会講演会）「量子光学と量子情報処理」（12月）、名古屋講演会（兼光応用研究技術研究会）が開催（愛知工大、12月）されました。なお、今後は光学会独自の講演会は従来の定期開催方式ではなく、その地区幹事を中心としたグループが企画して、光学会ではそれを支援する体制で実施するように、幹事会としては地区幹事を充実しました。

平成9年度の予算は「OR」に対する親学会である応用物理学会からの補助金の打ち切りに伴い500万円の赤字予算でしたが、交通費を始めとした諸経常経費の削減、講演会の独立採算化などを行ってきましたが、今年度は「光学」「OR」の会誌に關した経費が光学会経費の75%を費やしているのでこの経費全体の見直しを断行し、他学会の状況調査、印刷・編集業務の勉強などを行いつこれらの経費を約半分に圧縮することができました。詳細は会計報告に記載されています。「会運営の健全化」は一朝一夕で達成するものではありませんが、地道な努力が必要だと思います。国際会議の開催、研究グループへの援助、地区講演会の充実など魅力ある学会運営に使えるようにしていきたいものです。

日本光学会の企画、運営、また出版などの活動を知っていたためにホームページを充実させ、開かれた学会になれるように努力いたします。今後とも日本光学会へのご支援、ご協力を願っています。

2. 編 集

「光学」

編集委員長 伊東 一良

ご存知のように、「光学」は第27巻第1号からサイズが

A4化された。A4化は時代の流れでもあったが、「光学」のA4化は横田前幹事長の発案で検討が始まり、幹事長の強力な援助によって実現された。A4化以来、依然として発刊は遅れがちであるが、編集委員の役割分担の見直しも完了したので、新体制が軌道に乗るのをお待ちいただきたい。27巻では、「光の広場」が新設された。このコラムを、若い人達の楽しめる魅力的なコラムへと発展させていきたい。

1993年から97年の過去5年間に、「光学」に掲載された原著論文の数は、順に54, 44, 45, 33, 21と減少の一途をたどり、昨年は1号あたり平均2編の線を割っている。しかし、98年は1月からの4か月間に、14編もの投稿があった。これは、OPTICS JAPAN '98と98年秋の応用物理学会光分科、光エレクトロニクス分科、量子エレクトロニクス分科での登壇者に対して電子メールで配信した「光学」の内容刷新の通知と原著論文投稿の勧めの効果かもしれない。今後の推移を見守りたい。グローバル化が急速に加速されつつある現在、日本語による原著論文の意義を問い合わせる必要があるかもしれないが、何よりも原著論文欄の存続は原著論文の投稿数にかかっている。

昨年の10月から「光学」ホームページをインターネット上に開設し、最新号の目次や過去の特集と今後の予定、96年からの総目次のほか、投稿案内などを公開している。日本光学会ホームページとのリンクを張って以来、現在までのアクセスの数は2,000件を超えていている。

26巻4号には、慣例で平成8年度光学論文賞受賞論文紹介の記事が掲載されるはずであったが、これが掲載されなかった。この記事は27巻4号に平成9年度の光学論文賞受賞論文紹介の記事とともに掲載されている。伝統ある光学論文賞の受賞論文紹介記事が、光学会の歴史を記す役割をもった「光学」に正しく掲載されなかつたことを深くお詫びする次第である。またこの機会に指摘のあった25巻8号に未掲載の平成7年度光学論文賞受賞記念解説についても、27巻中に掲載する予定である。

今後このような事態が生じることのないように、慣例となっている事項を明文化し、関係者間の連絡・引き継ぎを密にしていく作業を始めている。

「OPTICAL REVIEW」

前編集委員長 伊藤 良一

OPTICAL REVIEWにとって創刊4年目となる1997年は、Optical Fiber SensorのSpecial Issueを含む7冊、計712ページが刊行され、掲載論文数は合計146編であった。

投稿数は90編で、内訳は国内79編、海外11編、そのうち約80%は光学会会員からの投稿であった。96年実績に対し29編の減少であった。創刊以来少しづつ増加していく投稿数に初めてストップがかかったことは誠に残念である。会員諸兄からの投稿を切にお願いする。

投稿の内訳は、多い順に Photonics and Optoelectronics (20), Optical Systems and Technologies (17), Information Optics (13), Lasers (10), General and Physical Optics (9), Nonlinear Optics (8), Environmental, Biological and Space Optics (4), Vision (4), Optical Materials and Manufacturing Technologies (3), Quantum Optics and Spectroscopy (1), Far Infrared and Short Wavelength Optics (1) であった。投稿の少ない分野に対し積極的に投稿を呼びかけ、できるだけバランスよく掲載することが今後の課題であろう。

反面、ホームページのアクセス件数は開設以来順調に伸びつづけており、現在までで18万件を超えるアクセス(そのうち海外からのアクセスは約40%)を記録している。投稿および購読の増加につながることを期待してやまない。

投稿および購読勧誘としては、国内で開催された光学関連の各学会・研究会において展示・配布によるPR活動をした。関係各位のご協力に感謝する。当面は、やはりホームページの情報の鮮度を保ち、PR活動を進め、積極的に投稿および購読を呼びかけることが必要と思われる。

1998年1号より、海外頒布はSpringer Verlag社を通して行うこととした。この措置で海外サーキュレーションが増加することを期待している。

3. 研究グループの活動

(1) 位相共役・光波ミキシング研究グループ

第44回応用物理学会関係連合講演会シンポジウム「高密度3次元光メモリー」を開催。参加者約150名。6月9・10日にWaseda International Symposium on Phase Conjugation & Wave Mixingを早稲田大学国際会議場にて、6月11~13日にTopical Meeting on Photorefractive Materials Effects and Devicesを日本エアロビクスセンターにて、いずれも応用物理学会、OSA、早稲田大学と共に開催した。参加者は約170名(うち国外約80名)。

(2) イメージサイエンス研究グループ

OPTICS JAPAN '97では「バイオメディカル・オプティックス & イメージング」にてスペシャルセッションを開催した。また特別講演「高散乱媒質における光波散乱の現象と応用」を開催した。ISG NEWSLETTERの22・23

号を発行し、ISG FORUMを開設した。また春季・秋季の応物学会にてインフォーマルミーティングを開催した。

(3) 近接場光学研究グループ

今年度前半には研究討論会を開催した(7月、大阪大学)。参加者は71名、発表件数19件であり前回までと同様の盛況であった。後半には参加人数を少数に制限し(参加者29名)、泊り込み(2泊3日)で全員発言義務のもとに集中討論をするトピカルミーティングを開催した(12月、宮城県松島町「仙松閣」)。「近接場と電子系との相互作用」に関する問題提起と今後の研究の課題について討論した。きわめて有意義であり、来年度も開催の希望が多く寄せられた。

(4) コンテンポラリーオプティックス研究グループ

第7回コンテンポラリーオプティックス研究会「光教育に関する最近の話題」を開催した。また「光教育の現状を報告する」というテーマにて懇親会を開催した。

(5) 視覚研究グループ

応用物理学会講演会、OPTICS JAPANの発表についてのテクニカルミーティングである2回の研究討論会、国内および国外の研究者による特別講演会をそれぞれ1回開催した。いずれも参加者は30名から45名程度であり、これらの会の目的である十分な議論に適しており成果があった。このほかにARVO(アメリカ眼光学会)年次大会の参加者による発表内容の紹介をインターネットを通じて行い、情報交換の場を提供した。

(6) 光コンピューティング研究グループ

5回の光コンピューティング研究会を開催した。第76回は情報処理学会計算機アーキテクチャ研究会、電子情報通信学会フォトニックプロセッシング時限研究専門委員会との合同研究会で、協賛は新情報処理開発機構であった(参加者23人)。第77回は応用物理学会のインフォーマルミーティング(参加者17人)、第78回は合宿(参加者28人)、第79回(参加者82人)と第80回(参加者18人)は電子情報通信学会光インターフェクト情報処理研究会と共に開催した。また機関紙OPCONEWSを5回発行した。主な内容は、研究会の報告・感想文、会員プロフィール、会員名簿、会よりのお知らせ、文献リストなどである。

(7) 光設計研究グループ

第44回応用物理学会関係連合講演会シンポジウム「光設計のフロンティア」の企画、第11回研究会「電子画像

と光設計」，第12回研究会「立体ディスプレーと光設計」，第13回研究会「光設計研究グループ夏の学校—レンズ設計者の新たな視点」，第14回研究会「光学顕微鏡—その奥義と新展開」を開催した。またレンズ設計の著名人との座談会を開催した。会誌 OPTICS DESIGN No. 11～No. 14 を発行した。

(8) 微小光学研究グループ

97年度は計画どおり4回の微小光学研究会と国際会議(MOC/GRIN'97)を開催した。また機関紙 MICRO-OPTICS NEWS Vol. 15, No. 1～No. 4 を発行した。

(9) ホログラフィックディスプレイ研究グループ

研究会として第1回「ホログラムの産業応用とその周辺技術」(参加者約70名)，第2回「ホログラフィック・テレビジョン」(参加者約70名)，第3回(参加者約30名)第4回「ホログラフィーとアート」を開催した。また公募による講演会(参加者約50名)を開催した。また研究会会報(HODIC Circular)を4回発行した。また3次元画像コンファレンスの協賛，HODIC 鈴木雅根賞の選考および贈呈，海外のホログラフィー研究グループとの交流等の活動を行った。

4. 会 計

前会計幹事 関谷 尊臣

平成9年度の決算状況を，予算と対比して報告いたします。平成9年度予算は，欧文誌「OPTICAL REVIEW」に対する補助金打ち切りに伴い，約500万円の赤字予算となっていました。管理費などの見直しだけではこれ以上の

赤字改善策を打ち出すことができぬほど，切りつめた運営を行った上で，再度全体の費用配分を検討しました。会誌・欧文誌2冊の会誌発行費用の予算全体に占める比率が約75%である点に着目し，印刷経費全体の見直しを断行いたしました。横田幹事長を中心に他学会の状況調査や印刷・編集業務の勉強なども行い，複数の印刷所からの見積りなどを検討した結果，印刷費を約2分の1に圧縮することができました。これを年度末の10月から実施できたことと，年間18冊分の印刷費の全てを計上しなかったこと，OPTICS JAPAN'97，光学シンポジウム，冬期講習会など，研究会や講習会などの事業が順調で収支も良好であったため，平成9年度決算では収入の増加と支出の減少により，予想されていた赤字を大幅に圧縮し，結局740万円の黒字となりました。

印刷費用見直しを断行した際，念願の「光学」のA4化が実現でき，平成10年1号より大判の「光学」を発行できるようになりました。また平成10年度の予算は，「会運営の健全化」を合言葉に大幅な見直しを行いました。印刷費用のみならず，「光学」と欧文誌を同封することで郵送費用を軽減するなど合理化による抑制を推し進めました。一方，インターネットにおける光学会のホームページ運営を軌道に乗せたり，SPIEをはじめとする海外の学会との協調をはかり国際会議の開催を準備するなど，新たな事業へ大幅な予算配分を盛り込んでいます。

このように黒字に転換したように見える予算状況ですが，「会運営の健全化」は一朝一夕で達成できるものではありません。日本光学会がより魅力ある学会として発展するため，会運営の透明化・健全化を実現するとともに，会員各位の一層のご支援をよろしくお願ひいたします。

平成 9 年度事業報告／平成 10 年度事業計画

	平成 9 年度事業報告(平成 9 年 1 月 1 日～12 月 31 日)	平成 10 年度事業計画(平成 10 年 1 月 1 日～12 月 31 日)		
1. 会誌の発行	「光学」 Vol. 26, No. 1～12	「光学」 Vol. 27, No. 1～12		
2. 欧文誌の発行	「OPTICAL REVIEW」 Vol. 4, No. 1～6	「OPTICAL REVIEW」 Vol. 5, No. 1～6		
3. 光学論文賞、日本光学会奨励賞の授賞	光学論文賞 ・金子 寛彦(ATR 人間情報通信研究所) ・本田 徳行(工業技術院計量研究所) 日本光学会奨励賞 ・阿部 真之(大阪大学工学部電子工学科)	光学論文賞 日本光学会奨励賞		
4. 講演会、講習会	第 23 回冬期講習会「発光デバイスの最先端—レーザーからディスプレイまで—」 第 30 回光学五学会関西支部連合講演会「構造で色を創る—表面構造と光学現象—」 第 22 回光学シンポジウム「光学系および光学素子の設計、製作、評価を中心にして」 OPTICS JAPAN '97 (仙台、東北工業大学) カラーフォーラム JAPAN '97 平成 9 年度関西講演会「量子光学と量子情報処理」 平成 9 年度光学名古屋講演会	1 月 13～14 日 2 月 7 日 6 月 26～27 日 9 月 30 日～10 月 1 日 11 月 11～13 日 12 月 5 日 12 月 12 日	第 24 回冬期講習会「光ファイバ通信の基礎と最先端」 第 31 回光学五学会関西支部連合講演会「色を感じる」 第 23 回光学シンポジウム「光学系および光学素子の設計、製作、評価を中心にして」 OPTICS JAPAN '98 (岡山、岡山理科大) カラーフォーラム JAPAN '98 平成 10 年度関西講演会 平成 10 年度光学名古屋講演会	1 月 22～23 日 2 月 7 日 6 月 25～26 日 9 月 18～19 日 11 月 11 月 12 月
5. 研究グループ	イメージサイエンス、位相共役・光波ミキシング、コンテンツポラリーオプティックス、近接場光学、視覚、光コンピューティング、光設計、ホログラフィックディスプレイ、微小光学	イメージサイエンス、位相共役・光波ミキシング、コンテンツポラリーオプティックス、近接場光学、視覚、光コンピューティング、光設計、ホログラフィックディスプレイ、微小光学		
6. 幹事会、委員会	幹事会 常任幹事会 「光学」編集委員会 文献抄録委員会 文献抄録委員会(関西) 「OPTICAL REVIEW」編集委員会 「OPTICAL REVIEW」運営委員会	3 回 3 回 6 回 6 回 3 回 1 回 1 回	幹事会 常任幹事会 「光学」編集委員会 文献抄録委員会 文献抄録委員会(関西) 「OPTICAL REVIEW」編集委員会 「OPTICAL REVIEW」出版委員会	3 回 3 回 6 回 6 回 3 回 1 回 3 回
7. 会員数	平成 9 年 12 月末日現在 (() 内は昨年度) A 会員 758 名 (776 名) B 会員 1,163 名 (1,201 名) 特別会員 178 名 (178 口) 賛助会員 94 社 155 口 (91 社 153 口)			

平成 9 年度収支決算

<収入の部>

大科目	中科目	金額	内 容 (金額記入)
会 費 収 入		15,523,960	
	会 費 収 入	15,523,960	
事 業 収 入		32,166,943	
	講習会、講演会収入	4,957,000	サマーセミナー 0, 冬期講習会 1,262,000, 光学連合シンポ 2,664,000, その他 1,031,000
	会誌出版事業収入 「光 学」	7,804,940	別刷代収入 1,929,940, 広告料収入 5,875,000
	欧文誌出版事業収入 「OPTICAL REVIEW」	18,405,003	
	そ の 他 事 業 収 入	1,000,000	一般会計寄付金
雑 収 入		409,869	
	受 取 利 息	73,460	
	雑 収 入	336,409	バックナンバー, 資料コピー代
引 当 金 戻 入		379,795	
	回収不能引当金戻入	379,795	
繰 入 金 収 入		12,693,080	
	分科会賛助会費還元金	4,992,000	40,000×80%×156 口
	分 科 会 給 与 補 助	7,701,080	学会担当者分
当 期 収 入 合 計		61,173,647	
前期繰越収支差額		31,026,316	
収 入 合 計		92,199,963	

<支出の部>

大科目	中科目	金額	内 容 (金額記入)
講習会、講演会事業費		3,588,448	
	臨 時 雇 貨 金	547,985	アルバイター手当, サマーセミナー 0, 冬期講習会 28,000, 光学連合シンポ 491,985, その他 28,000
	印 刷 製 本 費	1,343,845	サマーセミナー 0, 冬期講習会 191,625, 光学連合シンポ 917,175, その他 235,045
	諸 経 費	1,696,618	会議費 0/73,166/455,922/196,842, 旅費交通費 0/0/90,160/12,680, 通信運搬費 0/4,230/61,810/69,410, 消耗品費 0/566/19,795/0, 貸借料 0/0/29,022/0, 諸謝金 0/362,641/44,444/260,554, 雑費 0/257/13,650/1,469
会誌出版事業「光 学」		17,680,814	
	印 刷 製 本 費	11,822,591	
	発 送 通 信 費	2,676,930	
	諸 経 費	3,181,293	会議費 68,946, 旅費交通費 1,030,340, 通信運搬費 211,594, 消耗品費 47,470, 貸借料 29,860, 編集委託費 1,748,276, 諸謝金 38,762, 雑費 6,045
欧文誌出版事業「OPTICAL REVIEW」		18,865,964	
	印 刷 製 本 費	15,838,532	
	発 送 通 信 費	1,129,057	
	諸 経 費	1,898,375	会議費 25,200, 旅費交通費 0, 通信運搬費 231,103, 消耗品費 2,880, 臨時雇賃金 0, 貸借料 0, 編集委託費 1,524,112, 諸謝金 0, 雑費 115,080
そ の 他 事 業 費		1,432,120	
	助 成 金 支 出	1,432,120	関係先補助金等, 研究グループ
管理費 (含 幹事会)		10,031,834	
	給 与 手 当	7,701,080	学会担当者負担
	印 刷 製 本 費	126,796	諸印刷代, 資料コピー代
	賃 借 料	47,700	
	諸 経 費	1,478,868	臨時雇賃金 29,500, 会議費 168,632, 旅費交通費 674,460, 消耗品費 43,362, 通信運搬費 258,986, 諸謝金 0, 雑費 126,194, 消費税 165,134, 振替手数料 12,600
繰 入 金 支 出	回 収 不 能 引 当 金	677,390	
		2,130,540	(他会計への支出額)
	学 会 事 務 費	2,130,540	事務手数料
予 備 費		0	
当 期 支 出 合 計		53,729,720	
当 期 収 支 差 額		7,443,927	
次期繰越収支差額		38,470,243	

平成 10 年度収支予算

平成 10 年 1 月 1 日～12 月 31 日

<収入の部>

大科目	中科目	金額	内 容(金額記入)
会 費 収 入		19,213,000	
	会 費 収 入	19,213,000	A, B 会員 1,692 名×9,600, 学生会員 45 名×6,000, 特別会員 180 社×15,000
事 業 収 入		24,502,000	
	講習会, 講演会収入	4,815,000	サマーセミナー 0, 冬期講習会 1,195,000, Optics Japan 2,670,000, その他 950,000
	会誌出版事業収入 「光 学」	8,500,000	別刷代収入 2,500,000, 広告料収入 6,000,000
	欧文誌出版事業収入 「OPTICAL REVIEW」	11,187,000	
	その 他 事 業 収 入	0	
雜 収 入		400,000	
	受 取 利 息	150,000	
	雜 収 入	250,000	バックナンバー, 資料コピー代
そ の 他 収 入		1,000,000	
	一般会計寄付金収入	1,000,000	
引 当 金 戻 入		0	
	回 収 不 能 引 当 金 戻 入	0	
繰 入 金 収 入		12,720,000	
	分科会賛助会費還元金	4,928,000	40,000×80%×154 口
	分 科 会 給 与 補 助	7,792,000	学会担当者分
当 期 収 入 合 計		57,835,000	
前期繰越収支差額		26,171,000	
収 入 合 計		84,006,000	

<支出の部>

大科目	中科目	金額	内 容(金額記入)
講習会, 講演会事業費		3,840,000	冬期講習会 710,000/Optics Japan 2,570,000/その他 560,000
	臨 時 雇 賃 金	356,000	アルバイター手当 28,000/300,000/28,000
	印 刷 製 本 費	1,430,000	200,000/1,000,000/230,000
	諸 経 費	2,054,000	会議費 50,000/550,000/50,000, 賃借料 0/230,000/0, 旅費交通費 100,000/100,000/10,000, 諸謝礼 300,000/150,000/150,000, 通信運搬費 20,000/120,000/70,000, 雑費 5,000/20,000/12,000, 消耗品費 7,000/100,000/10,000
会誌出版事業「光 学」		16,222,000	
	印 刷 製 本 費	7,200,000	会誌
	発 送 通 信 費	1,883,000	発送通信費
	諸 経 費	7,139,000	会議費 90,000, 賃借料 15,000, 旅費交通費 1,000,000, 編集委託費 4,741,000, 通信運搬費 310,000, 諸謝費 933,000, 消耗品費 0, 雑費 50,000
欧文誌出版事業「OPTICAL REVIEW」		10,776,000	
	印 刷 製 本 費	5,400,000	
	発 送 通 信 費	1,172,000	
	諸 経 費	4,204,000	会議費 60,000, 賃借料 0, 旅費交通費 0, 編集委託費 3,929,000, 通信運搬費 215,000, 臨時雇賃金 0, 消耗品費 0, 雑費 0
そ の 他 事 業 費		1,600,000	
	助 成 金 支 出	1,600,000	
国際協力支援金		3,000,000	
ホームページ運営費		1,000,000	
管理費(含 幹事会)		9,737,000	
	給 与 手 当	7,792,000	学会担当者負担(収支帳消し)
	印 刷 製 本 費	50,000	諸印刷代, 資料コピー代
	賃 借 料	10,000	
	諸 経 費	1,385,000	臨時雇賃金 30,000, 諸謝金 0, 会議費 50,000, 雑費 200,000, 旅費交通費 700,000, 消費税 50,000, 消耗品費 40,000, 振替手数料 15,000
	回 収 不 能 引 当 金	500,000	
繰 入 金 支 出		2,101,000	(他会計への支出額)
	学 会 事 務 費	2,101,000	事務手数料
予 備 費		100,000	
当 期 支 出 合 計		48,376,000	
当 期 収 支 差 額		9,459,000	
次期繰越収支差額		35,630,000	